

自転車愛好家の視点から見たサイクリングルート特性分析

徳島大学大学院 学生員 ○貞本健志

徳島大学大学院 正会員 山中英生

徳島大学大学院 学生員 竹内 彩

1. はじめに

近年、環境意識の向上や健康ブームから、自転車は通勤や休日のレクリエーションに利用されている。自転車愛好家は、楽しみ方を充分理解したハイユーザー層と楽しみを始めたばかりのミドルユーザー層に分けられる。さらに自転車愛好家が増加するにつれ、サイクリングの利用の幅は広がりを見せており、様々な形態が生まれている。その代表例として、自由きままに走行する「ポタリング」(走行距離は30km未満)、スポーツバイクを用いて長距離走行する「日帰りサイクリング」(走行距離は20~100km)、宿泊を伴う「宿泊サイクリング」(走行距離は50~120km)がある。これら3つの形態やユーザー層間では、楽しみ方に違いがあれば求めている走行環境にも違いがある。よって、多様なサイクリングの利用を促進するためには、それぞれのルート特性を明らかにし、走行環境を改善してゆくことが必要である。このため本研究では自転車愛好家の視点に着目し、ヒアリング調査と文献調査からサイクリングの楽しみ方の違いによるルート特性の比較を行なうことを目的としている。

2. 調査方法

ヒアリング調査は徳島県内のハイユーザー層である自転車愛好家30名に行なった。ヒアリング項目としては、1)よく走行しているルートはどこか、2)ルート上で快適な場所はどこか、3)ルート上で不快な場所はどこか、の3項目である。また文献調査においては、ミドルユーザー層向けに出版されている「自転車散歩」を用いた。この文献は、サイクリングの入門向けに編集者自身が実走取材してまとめたものであり、全国の地域ごとにシリーズ化されている。今回はヒアリング調査と地域格差が生まれないように徳島県に地形が似ている地域を選定した。文献の体裁は、見開き1ページに高低差表やルート上の見所を含むコースの説明があり、次の見開き1ページにルート図が掲載されている。これら2つの調査から、走行ルートと評価コメントを抽出し、ルート特性の分析を行なった。

3. 分析結果

(1) 評価視点別コメント

2つの調査から抽出したコメントを「景観」、「路面状態」、「幅員」、「交通量」、「傾斜」、「沿道状況」、「その他」という7つの項目に分類し、1ルートごとに指摘される割合を表したものが下図である。ポタリングは、「景観」「沿道状況」を重要視しているが、「幅員」は気にしていない傾向にある。日帰りサイクリングは、「路面状態」「幅員」を重視して走行しており、またトレーニングとして、「傾斜」がある道を好んで走行している傾向にある。宿泊サイクリングは、疲労回避のため「路面状態」が悪い道、「傾斜」のある道は避けて走行しており、また大荷物になることがあるので「幅員」を重要視して走行している傾向にある。次にユーザー層間で比較を見てみると、ハイユーザーは、項目をまんべんなく気にしているのにも関わらず、ミドルユーザー向けの文献は特に景観を重要視している傾向にある。

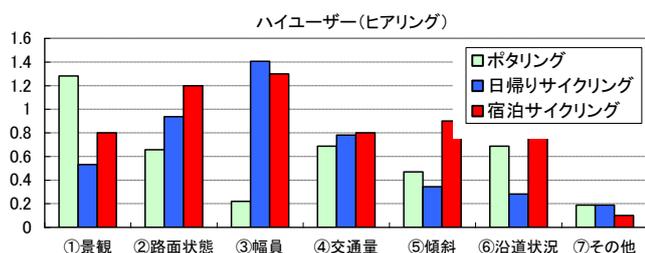


図-1 評価視点別コメント (ヒアリング調査)

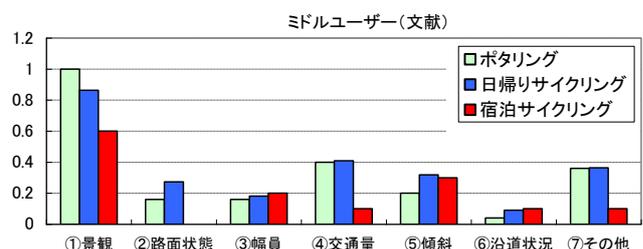


図-2 評価視点別コメント (文献調査)

(2) 平均リンク長

平均リンク長とは、曲ったポイントから再び曲るまでの平均距離のことで、これを累加グラフで表し、比較したものが以下の図である。ポタリングにおいては、ハイユーザー全体の80%が1 km以内に曲っている一方で、文献では2 km以内と1 km以上の差が見られた。宿泊サイクリングにおいては、ハイユーザー全体の80%が6 km以内に曲っている一方で、文献では20 km以内とかなりの差が見られた。よってハイユーザーは直線をつまらないものと考えリンク長が短くなっていることが考えられる。

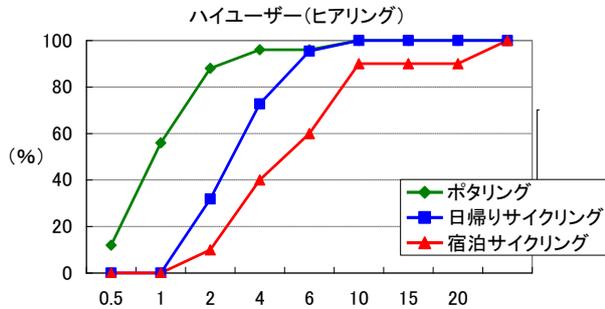


図-3 平均リンク長 (ヒアリング調査)

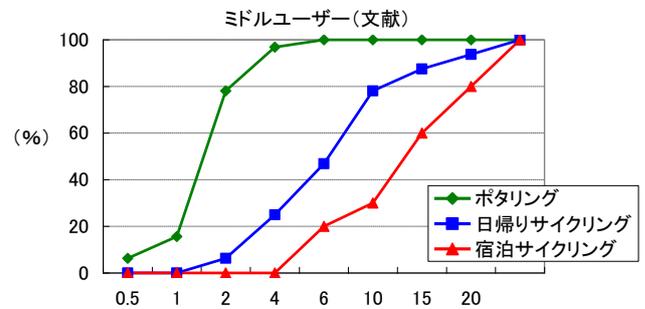


図-4 平均リンク長 (文献調査)

(3) 同一沿道景観継続長

同一沿道景観継続長とは、沿道景観が変化したポイントから再び変化するまでの平均距離のことで、これを累加グラフで表し、比較したものが以下の図である。ポタリングでは、ハイユーザー全体の80%が3 km以内に景色変化している一方で文献では4 km以内であった。宿泊サイクリングでは、ハイユーザー全体の80%が10 km以内に景色変化している一方で、文献では20 km以内であった。よって、ハイユーザーは景色変化のある道を好んで走行しているため、継続長が短くなっていることが考えられる。

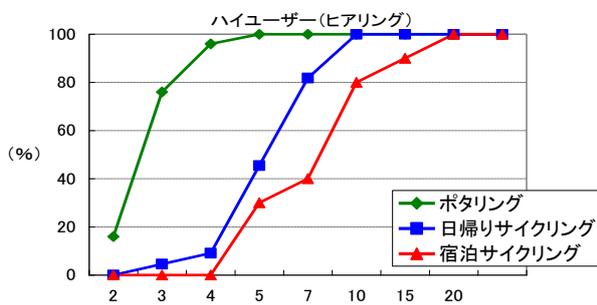


図-5 同一沿道景観継続長 (ヒアリング調査)

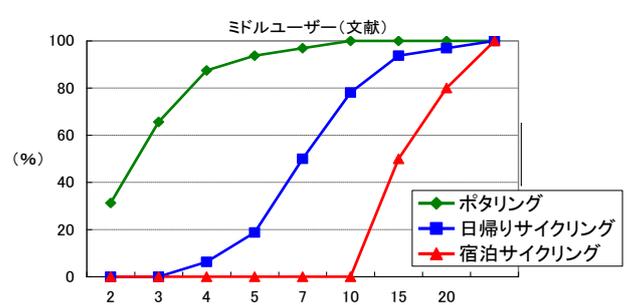


図-6 同一沿道景観継続長 (文献調査)

4. まとめ

最後に、本研究で得られた結論について述べる。

- ① ポタリングはルートの特に定めず、ゆっくりと走行するため、「沿道景観」、「看板・案内標識」を重要視して走行しているが、旧街道などの幅員の狭い道を走行するため、「幅員」はあまり気にしていない傾向にある。また、景色変化に富んだコースを走行しており、単調な一本道のようなルートは避けていることも明らかになった。
- ② 日帰りサイクリングはスピードを出して走行することを目的としている人が多い。そのため、十分な「幅員」や「路面状態」の良い道が好まれる傾向にある。また、トレーニングとして日帰りサイクリングを行なう人がいるため、「傾斜がある道 (山道等)」を好んで走行していることも明らかになった。
- ③ 宿泊サイクリングは、疲労軽減のために「路面の悪い道」、「傾斜のある坂」などは避けて走行しており、重装備となることが多いので「十分な幅員」のある道でないと不安で走行できないことが分かった。また、他の形態と比べるとあまり曲らずに走行していることが明らかになった。
- ④ ハイユーザーは景色変化が多数ある道を好んで走行しており、また直線が続く単調な道を避けて走行していることが明らかになった。